

「キハ2004」が平成筑豊鉄道に

昭和を駆けた 動く鉄道遺産

約半世紀を走り抜き、茨城県のひたちなか海浜鉄道で
一時代を終えようとしていた気動車「キハ2004」が
万感の思いで金田駅に迎え入れられました。



県内外のボランティアが補修
茨城県から6日間かけて金田駅に到着した
車両。潮風を浴びていた片側のサビが激
しく、お披露目に向け、セレモニーの直前
までファンや関係者など多くの人が塗装
の補修作業をボランティアで行いました。



撮影：おらが浜鉄道応援団

国鉄時代の雰囲気色濃く

九州鉄道記念館(北九州市門司区)
の厚意で当時使用されていた「ひか
り」[ながさき号]のヘッドマークを準
備。国鉄準急色に「日本国有鉄道」
の銘板が一体となっています。ファ
ンの間ではエンジン音も大人気。



かつて人気を博した国鉄車両運行イベント

現役当時、平成筑豊鉄道本線で国鉄車両を走らせるイベントなどを地元
のへいちくファンとともに企画していた前田会長。最後に国鉄運行イベ
ントが行われたのは平成19年12月。多くの人が車両撮影に訪れました。

栄光の「ひかり号」

昭和33年に登場した九州
の急行列車「ひかり号」で使
用されていたキハ55・26は、
筑豊を走るひこさん号にも
使用されていました。キハ
2004はこの「ひかり号」の面
影を残した貴重な車両です。



撮影：奈良崎博保

キハ2004お披露目式

12月3日、約100人が見守
る中、国鉄準急色をまとった
キハ2004がお披露目されま
した。関係者と来賓による記
念すべきコマ(左から)平
筑 今田専務、嶋野町長、ひ
たちなか海浜鉄道 西野管理
部長、九州鉄道記念館 佐
藤館長、キハ2004を守る会
前田会長、平筑 迫田常務。



国内唯一の国鉄準急色車両 福智で迎えた新たな出発点

「シャッター、オープン！」
一瞬、静かになる会場。ほどなくして
車庫が開き、歓声とカメラのシャッター
音が響く中、ついにクリーム色の車体が
堂々と姿を現しました。

「国鉄準急色」と呼ばれるレトロな塗装
は、かつて高度経済成長期に九州で都市
間を走った準急「ひかり号」を彷彿とさ
せるカラー。この塗装は後に「急行色」と
呼ばれる色に変更されたことから、現在、
この国鉄準急色をまとった車両は、全国
でもこの一台しか存在しません。車体は
昭和41年、国鉄設計に準じて製造され
たディーゼル車(気動車)。内外装とも製
造当時のままの原型をとどめ、懐かしい
雰囲気伝わってきます。心臓部である
エンジンは国鉄の定番だったDMH17系。
昭和32年製造ですが状態も良く、ガラガ
ラと力強く響くエンジン音が特徴です。

このように国鉄のイメージを色濃く
残した国内でも貴重な「キハ2004」が
茨城県のひたちなか海浜鉄道からネッ
ト募金により「キハ2004を守る会」
に無償譲渡されました。

12月3日には金田駅構内で、譲渡セ
レモニーと募金者限定のお披露目式を開
催。全国のファンなど約百人の前に登場
したキハ2004は、勢いよく煙を立ち
上げ、独特のエンジン音を響かせました。

「涙が出た」「感動した」といった声が寄
せられたこの瞬間を心から待ち望んでい
たのが、前田忠会長をはじめとする「キ
ハ2004を守る会」のみなさんでした。

キハ2004を守る会は、平成筑豊鉄
道で清掃やイベント時などのボランティ
アを行っている鉄道OBや鉄道ファンを
中心としたグループ。平成27年12月ま
でひたちなか海浜鉄道湊線の主力車両
として活躍してきたキハ2004が解体
予定であることを知り、昨年7月に結成
されました。前田会長は平成筑豊鉄道
の元職員。国鉄時代には、ディーゼル車
の保守にも携わっていました。

「国鉄型車両は、イベント等でも特に
人気がありました。長年手がけた愛着
のある国鉄型車両が多くの人に喜ばれ
る様子は感慨深く、10年以上前から、
動く状態の国鉄型車両を平成筑豊鉄道
で保存できないかと模索してきました」。
しかし保守費用や安全確保など数々
の問題に阻まれ、実現できなかったとい
います。そんな中「キハ2004」と運
命的な出会いを果たした前田会長。

「国鉄型車両が年々引退して姿を消す
中、これが最後のチャンスだと今回の計
画に踏み出しました。九州鉄道記念館
をはじめ多くのご協力で、念願の動く
国鉄型車両を迎えることができました。
国鉄時代に触れていた車両と変わりに
なく、まさに『ひかり号』の里帰りに思え
てなりません」と感動を語りました。



かつて日本の近代化を支えた鉄道

明治26年に金田駅が開業。当時の筑豊は全国の石炭の半分を産出する日本一の産炭地で、鉄道と駅が日本を支えてきました。



地域とともに鉄道を未来へ

多くの企画でイメージアップや収入確保を図る平成筑豊鉄道。クラウドファンディング期間中の9月22日には無料運転体験イベントを開催し、募金活動をPRしました。キハ2004の車内には募金者の名前が並びます。



全国規模の集客力

新たなスタートを切ったキハ2004の撮影を楽しむクラウドファンディングの募金者。この日は全国各地から約70人が福智町を訪れました。皆さまへの一般公開は今年3月頃を予定しています。



昭和32年製造の貴重なエンジン

今ではもう製造されていない縦型エンジン。エンジンヘッド点検用のフタが床に設けられています。



懐かしさを感じる車内

木貼りの床や青のシート、灰皿など、国鉄設計のレトロな雰囲気が漂う車内。ディーゼル車のため、変速、直結の切り替えなど運転手による手動操作が多いことも特徴です。ハンドルは譲渡セレモニーの中で、ひたちなか海浜鉄道から守る会へ譲渡されました。



一台の車両が歴史をつなぐ

あきらめない情熱がもたらした希望のひかり

全国からのプロジェクト賛同者の寄付によって実現したキハ2004の誘致。魅力と可能性を秘めた一台の車両への期待が高まっています。

クラウドファンディングでつかんだ展望への転換点

金田駅でのキハ2004の動態保存を実現させるため、まず課題となったのは茨城県から車両を運ぶ輸送費でした。平成の幕開けとともに生まれた平成筑豊鉄道では、開業当初から旅客輸送の赤字をカバーしてきたセメント輸送が平成16年に廃止。加えて少子化による利用者減や自然災害での被害復旧などで赤字が累積し、県や沿線自治体の多大な助成を得てもなお経営難が続いています。イベント列車やラッピング広告など、収入を得る工夫を重ねていますが、到底、財政的な余裕は無い状況です。そこで目を付けたのが「クラウドファンディング」。インターネット上で全国に

向けて夢や目標を掲示し、賛同者から必要な資金を募る手法でした。

キハ2004を守る会と平成筑豊鉄道は一念発起し、関係機関との調整やPR手法の検討、お礼の選定など数々の準備を重ね、プロジェクトへの挑戦に踏み切りました。その結果、関係者やファンの懸命な努力により「国鉄型車両を金田駅へ」という一つの願いが全国に波及。昨年8月から募集期限までの約40日間で、360人の募金者から目標額の800万円を超える890万円もの寄付が寄せられました。

このクラウドファンディングによる成果は、国内唯一の貴重な車両を守りたいという願いと、平成筑豊鉄道と地域に込められた期待の表れに他なりません。その思いに応え、新たな地域資源を生み出すためにも、今後のキハ2004の価値を生かした活用が重要です。

これまで、平成筑豊鉄道や沿線は、直面する存続の危機を乗り越えるだけで必死でした。そのような中で実現したキハ2004の誘致は、全国規模での集客や国内でも例のない取り組みへの可能性をもたらしています。将来、このキハ2004の誘致を振り返ったとき、展望をもつて前へと進んだ歴史的な転換点になっっているかもしれません。

昭和を支えた歴史を受け継ぐ平成筑豊鉄道にいま、昭和を駆け抜けた一台の車両が、一筋の光を照らしています。